

聴覚障害者ラグビー（デフラグビー）が5月から、来年8月のパシフィック大会（フィジー）に向けた強化合宿をスタートさせた。22歳の倉津圭太（日本福祉大）を主将に抜擢し、15人制のテストマッチ初勝利を目指している。

倉津は先天性難聴で、身長も158センチと小柄だ。それでも静岡・東海大翔洋高3年のとき、スクラムハーフとして大阪・花園での全国大会に出場した。昨年はニュージーランド



（NZ）に半年留学し、本場のラグビーとデフラグビーに挑戦した。「ハンディがあっ

「あきらめない」難聴ラグー

ても、できない」とはないと証明したかった」

耳が聞こえにくい選手はスポーツ界で難しい立場にいる。指導者や仲間の声を理解できない。身体能力は高くても、耳が聞こえる選手と同じように活躍するには、ハンディを乗り越える必要がある。

一方、障害者スポーツの祭典パラリンピックには参加していない。手話の重要性に対する認識が違うためという。デフリンピックなど聴覚障害者の大会はあるものの注目度は低く、耳が聞こえにくい選手への理解は進みにくい。

高校でラグビーを始めた倉津も、当初は「危険」「無理」と周囲に反

対された。

だがブロックサインの活用を思いつき、コミュニケーションの壁を乗り越えた。軽度から重度まで様々な障害のある選手が集うデフラグビーでも、チームをまとめることを期待されている。

来年のパシフィック大会は日本のほか、フィジーとオーストラリア、NZといった強豪国が参加する。

それでも倉津は優勝を見据える。「障害があるからラグビーができない、と思いきこんでいる人が多いけれど、そんなことはない。来年の大会も、やる前からあきらめない」

（由利英明）